

主 題：信仰者と罪：壊れた関係を修復する4

聖書箇所：コリント人への手紙第二 7章8－10節

テーマ：教会における兄弟姉妹の関係を含め、壊れた関係を修復するためには

今朝、見ていくみことばはⅡコリント7：8－10です。先週はⅡコリントから離れて、「教会、神の家族」についてⅠコリント12章から改めて考えました。救われた私たちは今、キリストにあってどのような者へと変えられたのか、信仰生活をともに生きる兄弟姉妹との関係がどれ程一人ひとりにとって大切なのか、今一度考えたのです。みことばははっきりと教えていました。私たちはみなキリストにあって一つとされていると。私たちはみな弱さをもって欠けている部分があります。そのことをだれよりもご存じの神様が、いたわり合い、お互いの必要を補い合っていくようにと、一つのキリストのからだに属する者として私たちを召してくださったのです。これは神がもっておられたすばらしいご計画でした。恵みによって私たちを救ってくださった神様は、恵みによって救われた後の私たちの歩みに必要なものをも備えてくださっているのです。だから、信仰者はだれ一人として他の兄弟姉妹から自分を切り離して生きていくことはできません。Ⅰコリント12：26－27に記されている通り「:26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。:27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」、これが私たちが決して忘れてはならない教会、神の家族の姿です。私たちにとって信仰生活をともに歩む兄弟姉妹との関係は、なくてはならない必要不可欠なものなのです。

さて、この重要性を覚えた上で、今日はⅡコリント7章に戻って「壊れた関係を修復するための八つの要素」のうちの四つ目を見ていきます。いつものようにみことばを読みます。これまでの内容を思い返しながら追ってください。7：5－10です。「:5 マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまな苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。:6 しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。:7 ただテトスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。:8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、:9 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのためにこれまでの何の害も受けなかったのです。:10 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」

○壊れた関係を修復するための八つの要素

1. 慰めを与えてくださる神さま 5－6節
2. 準備されていた恵みの態度 6－7節
3. 愛を伴う罪への戒め 8－9節
4. 神のみこころに添った悲しみ 8－10節

罪によって壊れた関係を修復するには、罪を犯した人物のうちに働き悔い改めへと至らせる、そんな悲しみが必要となるのです。具体的にどういうことなのか？皆さん、もう一度8節と9節を見てください。「:8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、:9 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、

私たちのためにこれまでの何の害も受けなかったのです。」、

さて、私たちは今読んだ箇所「悲しみ」ということ、今日はそこに注目して考えていきたいのですが、皆さんに思い出していただきたいのは、8節9節の部分は三つ目の要素を見たときにも考えたところです。そのときの状況を憶えておられますか？今一度、パウロとコリント教会との間に起きていた出来事を思い返してみてください。コリント教会の兄弟姉妹たちは、自分たちのために犠牲を払って熱心に仕えてくれていたパウロを裏切るような行為を取っていました。彼らは教会に入り込んで来た偽教師たちを受け入れたばかりか、彼らの語る偽りの福音や教えを信じるようになっていたのです。それだけでなく、彼らはそのような間違った教師たちが流すパウロに関する嘘や噂、非難などを問題視することなく、そのまま信じて受け入れていました。コリント教会の兄弟姉妹たちと教会が誕生した時から1年半という時間をともにして、自分たちに愛と熱心さをもって仕えてくれたパウロのことを忘れてしまって、後から入り込んで来た偽教師たちのことばを信じて、彼らと一っしょになって、パウロのことを咎めていたのです。

この扱いはパウロにとって当然、非常に辛いものでした。しかし、コリントの教会を心から愛していたパウロはそのままの状態を見過ごすことはしませんでした。だからこそ、彼は彼らのもとを直接訪れてその問題を正そうとしたのです。さて、この訪問はどうなりましたか？残念ながら、悲しい結果に終わりました。コリントの教会は間違いを認めなかったばかりか、その中のある人物はパウロのことを教会全体の前で激しく非難し侮辱までしたのです。また、あろうことか、教会全体もパウロのことを弁護するのではなく、罪を犯した人物を正しくさばくのではなく、代わりに罪を正そうとしたパウロを拒絶したのです。これらのことは、いつも変わらず自分たちに接してくれていたパウロの愛を悉く踏みにじる行為でした。容易に想像できるように、このような様々な酷い扱いを受けたパウロの心は大きな傷を負っていました。何度も何度も罪を犯す者たちに対して、諦めてしまって距離を取ったり、失望して関係を断ち切ろうとしたとしてもおかしくはなかったでしょう。しかし、パウロはそんな頑なな者たち見捨てることを決してしようとはしませんでした。彼はコリントの兄弟姉妹を心から愛していたからこそ、彼らの罪を見て見ぬ振りをしようとはしなかったのです。だからこそ、間違った歩みから立ち返ることを祈りながら、涙ながらに罪を懲らしめる手紙をテモテに託して彼らに書き送ったのです。

それが8節の初めにあった「あの手紙」と呼ばれるものでした。書かれてあるように、その手紙は非常に厳しく罪を指摘するものであったから、コリントの教会の人たちを深く悲しませることになったのです。パウロの手紙はコリントの兄弟姉妹たちの心を砕きました。悲しませました。しかし、その結果どうなったか？彼らはパウロの厳しいことばによって罪に気づいて、そこから立ち返ろうとしたのです。彼らは単に厳しい指摘を悲しんで終わったのではなく、悲しんで悔い改めたのです。そして、そのようにして彼らが変わったということパウロは大いに喜びました。

さて、ここで皆さん、今日私たちが覚えたいカギになることがあります。それはパウロから厳しく罪を戒められた時、コリントの兄弟姉妹たちはその指摘に正しく対応し、罪に対して神のみこころに添った悲しみを抱いたということです。もう一度言いますが、コリントの兄弟姉妹たちはパウロから厳しく責められた時、罪を指摘されたときに、それに正しく応答して罪に対して神のみこころに添った悲しみを抱いたということです。そして、その悲しみが彼らのうちに悔い改めをもたらし、パウロとの関係を修復するのに働いたというわけです。カギになるのは「悲しみ」でした。

では、少し自分のこととして考えてみてください。皆さんはだれかから罪、過ちを指摘された時に、それに対してどのように応答していますか？「あなたのしていることはみことばから見ておかしいのではないですか？」と、そのように責められたときどのような思いを心に覚えますか？そのような指摘は、ときに、家族から来ることがあるかもしれません。また、仲の良い友人から来ることもあるでしょう。あるときは同じ教会のリーダーや兄弟姉妹からそのような指摘を受けることもあるでしょう。また、あると

きは自分自身がみことばを読んでいて、メッセージを聞いていて、そこで罪が示されることもあるでしょう。それがどのようなものであっても、だれかや何かによって自分の罪が明らかにされた場合、果たして、私たちはそれに対してどのように向き合っているのでしょうか？

ある人はこう言うかもしれません。私はだれかから罪を指摘されて自分の罪に気付いたときに、自分のしたことを後悔をし、自分の罪に対して悲しみを覚えますと。確かに、だれかに罪を指摘されると、私たちは多くの場合、悲しみを覚えることがあるのです。でも皆さん、ご存じですか？みことばは、悲しみには神様が望まれる悲しみと望まれない悲しみの二種類があると教えています。私たちはみな、だれかから罪を指摘された時に悲しい思いをするでしょう。でも、その悲しみは神様が望まれているものか、あるいは、神様が望まれていないものか…、この二つには違いがあるのです。

#### ●神のみこころに添った悲しみと世の悲しみ : 二人の人物

パウロはこのように記しています。このことばが今日のメインの箇所になります。「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」と。はっきりと書かれています。悲しみには二種類あります。「神のみこころに添った悲しみ」と「世の悲しみ」です。しかも、これらの悲しみには些細な違いがあるのではなく、それがもたらす結果には大きな違いがありました。一方は「悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせ」、もう一方は「死をもたらします」と書かれています。大きな違いです。では、皆さん、自分自身に尋ねてみてください。私たちが何か罪に気づかされた時に、私たちは悲しみを覚えますが、その悲しみは「悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせる」ものでしょうか？それともその悲しみは「死をもたらす」ものでしょうか？実際に、これらの悲しみはいったいどこに違いがあるのでしょうか？パウロの指摘に正しく応答したコリントの兄弟姉妹たちが持った「神のみこころに添った悲しみ」とは、いったいどのようなものなのでしょう？そのことを今日は特に時間をかけて考えてみたいと思います。そのことを今から聖書に登場する二人の人物から考えてみたいと思います。どうぞ、自分自身の心と向き合って考えてみてください。

私たちがこれから見て行く二人の人物はどちらも罪を犯しました。そして、どちらもそのことを他の人から指摘されました。どちらの人も嘆き悲しんでいました。どちらも同じように悲しみを覚えていたのです。しかし、一方は神のみこころに添った悲しみを抱き、もう一方は世の悲しみを抱いていたのです。ですから、その人物の歩みには非常に大きな影響がありました。では、その違いとは何でしょう？ご自分のこととしてともに考えてみましょう。

#### 1) 神のみこころに添った悲しみ : ダビデ

神のみこころに添った悲しみを抱いた人物として、私たちはダビデの姿を見て取ることができます。Ⅱサムエル記の11章からそのダビデの例を見ましょう。11:1-5です。ここは皆さんもよくご存じのところかと思いますが、ダビデが犯したその大きな罪の始まりがここに記されています。1節からこのように書かれています。「1 年が改まり、王たちが出陣するころ、ダビデは、ヨアブと自分の家来たちとイスラエルの全軍とを戦いに出した。彼らはアモン人を滅ぼし、ラバを包囲した。しかしダビデはエルサレムにとどまっていた。:2 ある夕暮れ時、ダビデは床から起き上がり、王宮の屋上を歩いていると、ひとりの女が、からだを洗っているのが屋上から見えた。その女は非常に美しかった。:3 ダビデは人をやって、その女について調べたところ、「あれはヘテ人ウリヤの妻で、エリアムの娘バテ・シェバではありませんか」との報告を受けた。:4 ダビデは使いの者をやって、その女を召し入れた。女が彼のところに来たので、彼はその女と寝た。——その女は月のものの汚れをきよめていた——それから女は自分の家へ帰った。:5 女はみごもったので、ダビデに人をやって、告げて言った。「私はみごもりました。」、本来なら、イスラエルの軍勢とともに戦いに出て行くべき王であるダビデがエルサレムに留まっていたある夕暮れ時、彼は屋上から見たひとりの女、ウリヤの妻であったバテシバを見初め、彼女と寝て、その結果、彼女はみごもるのです。罪を犯したダビデは彼女が身ごもったというその知らせを聞いて非常に困りました。だから、彼はいくつかの計画を立てて、その罪をどうにか

誤魔化そうとするのです。何をしたのか？一つ目の計画ははまず彼女の夫であるウリヤを戦場から呼び戻して家に帰し妻と寝させることでした。二人がいっしょに寝てくれれば自分のしたことがばれないと思ったのです。しかし、この計画はうまくいきませんでした。なぜなら、ウリヤはダビデ王のために戦場で戦っている者たちが数多くいるのに、自分だけが家には帰れませんかダビデ王に誓って言ったからです。こうして一つ目の計画が失敗に終わったので、ダビデは次の計画へと移ります。今度は何をしたのか？ダビデはウリヤを食事に招いて酔わせた後、またしてもバテシバのいる家に帰そうとするのです。でも、これもその通りにはいきませんでした。酔ってしまったウリヤは自分の誓いを破らないように、家の中には入ろうとせず、自分の主君の家来たちといっしょに一夜を過ごしたのです。

さて、後のないダビデは次の計画に移ります。その計画は、ウリヤを激戦の真っ正面に出して彼が打たれて死ぬようにせよという、そんな命令を手紙にして彼に持たせ戦場へと送り出すことでした。その結果、ウリヤは次の戦いにおいて戦死することになるのです。王に忠実であろうとしたウリヤは王であるダビデの手によって殺されていったのです。ダビデは情欲をもって女性を見て姦淫の罪を犯しただけではなく、その夫で忠実に仕えようとした者をも殺害するというそんな大きな罪を犯したのです。ウリヤが亡くなったことを知った時、ダビデは心の中でどんなことを思ったのでしょうか？恐らく、だれにもばれることなく問題を解決できた、すべて大丈夫だ…となったのでしょうか？

さて、そんな罪を犯したダビデのもとに預言者ナタンがやって来ます。彼はダビデに向かって、その罪を正しく戒めてこのように言いました。そのことがⅡサムエル 12: 9-12 に記されています。「9 それなのに、どうしてあなたは【主】のことばをさげすみ、わたしの目の前に悪を行ったのか。あなたはヘテ人ウリヤを剣で打ち、その妻を自分の妻にした。あなたが彼をアモン人の剣で切り殺したのだ。10 今や剣は、いつまでもあなたの家から離れない。あなたがわたしをさげすみ、ヘテ人ウリヤの妻を取り、自分の妻にしたからである。』11 【主】はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。12 あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行おう。』、ナタンはこのようにダビデのしたことを厳しく指摘しました。パウロがコリントの教会を厳しく指摘したのと同じように、ナタンは愛をもってこのように告げたのです。ダビデはだれにもばれていないと思ったでしょう。自分さえ黙っていれば問題にならないとそう思っていたでしょう。しかし、それが一転して明るみに出されたのです。

さて、皆さん、そのようにして罪が明らかにされたダビデは、いったいどのようにこの罪の戒めに対して罪の責めに対して応答したのでしょうか？そのことが次の 13 節、14 節に続いています。Ⅱサムエル 12: 13-14 「13 ダビデはナタンに言った。「私は【主】に対して罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「【主】もまた、あなたの罪を見過ごしてくださった。あなたは死なない。14 しかし、あなたはこのことによって、【主】の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」、ダビデははっきりと口にしていきます。「私は【主】に対して罪を犯した。」と。言い訳することなく自分の犯した罪を認めていました。ダビデは実際に姦淫の罪を犯し殺人の罪を犯し、人々をだましていたのです。でも、彼はここでバテシバに対してとかウリヤに対してというのではなく、「私は【主】に対して罪を犯した。」と告白しています。このことから「神のみこころに添った悲しみ」について、少なくとも二つのことを私たちは見ることができます。(1) 一つ目に言えることは、神のみこころに添った悲しみは、たとえどんな結果がそれに伴うことになったとしても、自分の罪をそのまま受け入れるということです。(2) もう一つは、神のみこころに添った悲しみは、自分の犯した罪はどんな罪であろうともまず何よりも神様に対して犯したものであると認めて、そのことを心から悔いている思いだということです。

皆さん、ナタンがダビデにかけた主のことばは非常に厳しいものでした。特に 12 節にこのように書かれていました。「あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行

おう。」と。「ダビデよ、あなたは隠れたところで罪を犯したけれども、そのあなたの罪はイスラエル全部に知られるようになる」と言うのです。皆さん、彼の犯したこれらの罪は、この当時だけでなく、今の私たちにも伝わっているのです。彼がどれほど酷い罪を犯したのか、今の私たちはみことばを通してこのように知ることができるのです。つまり、彼のこの隠れていた問題、隠れたところで犯した罪は、ナタンのことばの通りに世界中へ広まっていったのです。

皆さん、今少し考えてみてください。もし、だれかがあなたのところにやって来て「あなたが何をしたのか私は知っています。あなたがしたことはこれから世界中の人々に知られるようになります。」とこのように言われたとしたら皆さんどうしますか？その相手に対してどのように応答しますか？恐らく、私たちの多くはその罪を否定するでしょう。「いいえ、私はそんなことはしていません」と。あるいは、それ程酷い罪ではないとして、その罪を受け入れるのではなく、誤魔化すかもしれません。また逆に、そのようなことを言う人を責めて、自分の正しさをどうにかして訴えようとするかもしれません。私たちは罪を認めるといふこと、明らかになったその罪、罪を明らかにするということにおいて、それに何らかの結果が伴うとき、何らかの影響が伴うときに、公に恥を受けることであるか、だれかの信頼を失うことであるか、そのようなことにつながるなら、その罪を受け入れないとしてしまうことがあるでしょう。それが公になったら自分の立場が危うくなるからその罪を受け入れないでおこう…と。

でも、ダビデはそうではありませんでした。彼は自分の罪が公になろうと、それによって大きな辱めや痛みを負うことになっても、その罪がもたらす結果に心を奪われてはいなかったのです。ダビデはナタンに言われました。「イスラエルのすべてが知るようになる」と。でも、彼が言ったことは「私は【主】に対して罪を犯した。」でした。いったい、なぜ彼はそのように結果に心を奪われなかったのでしょうか？それは彼が、自分の犯した罪がほかのだれでもない聖い神様の御名をどれほど傷つけたのかということを知っていて、心から砕かれていたからです。彼は自分がしたことは神様を傷つけたことを分かっていました。彼の悲しみの根拠、理由は「神様を悲しませた」ことにあったのです。そして、そのような正しい悲しみが彼のうちにあったからこそ、彼は自分の罪を素直に認めて「私はただ主に対して罪を犯した」と、そのように告白したのです。

そして、そのような神のみこころに添った悲しみが彼のうちにあって心を砕かれていたからこそ、そこには主の赦しがあったのです。そのことが先に見たⅡサムエル12：13に書かれていました。「ダビデはナタンに言った。「私は【主】に対して罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「【主】もまた、あなたの罪を見過ごしてくださった。あなたは死なない。」と。ダビデが犯した罪によってもたらされた結果、大きな罰を彼は受けました。「あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」と言われた通りになりました。でも、彼の心は砕かれていたから罪を悔やんでいたからこそ、神様の前に間違っただけだと認めていたからこそ、そこに主の赦しがあったのです。そして、これが「神のみこころに添った悲しみ」だったのです。自分の犯した罪はどんな罪であろうとも、まず、何よりも神様に対して犯したものであると認めて、そのことを心から悔いること、砕かれた心、それが神のみこころに添った悲しみです。

さて、まず私たちはこうして神のみこころに添った悲しみについて考えてみました。でも、ある人は思っているかもしれません。どうも二つの悲しみの違いがまだよく分かりませんと…。それなら、もう一方の「世の悲しみ」の具体例を見てみましょう。これらを比較すると違いがよく分かると思います。今回、その例として考えるのは、ダビデ王の前任者であったサウル王です。

## 2) 世の悲しみ : サウル

今度はサウル王についてⅠサムエル記13章を見ましょう。そこにはサウル王がいけにえをささげている場面が出てきます。5-10節のところ。「:5 ペリシテ人もイスラエル人と戦うために集まった。戦車三万、騎兵六千、それに海辺の砂のように多い民であった。彼らは上って来て、ベテ・アベンの東、ミクマスに陣を敷いた。:6 イスラエルの人々は、民がひどく圧迫されて、自分たちが危険なのを見た。そこで、ほら穴や、奥

まった所、岩間、地下室、水ための中に隠れた。:7 またあるヘブル人はヨルダン川を渡って、ガドとギルアデの地へ行った。サウルはなおギルガルにとどまり、民はみな、震えながら彼に従っていた。:8 サウルは、サムエルが定めた日によって、七日間待ったが、サムエルはギルガルに来なかった。それで民は彼から離れて散って行こうとした。:9 そこでサウルは、「全焼のいけにえと和解のいけにえを私のところに持って来なさい」と言った。こうして彼は全焼のいけにえをささげた。:10 ちょうど彼が全焼のいけにえをささげ終わったとき、サムエルがやって来た。サウルは彼を迎えに出てあいさつした。」と。

さて、少し歴史的背景を思い返してみるなら、この当時のイスラエルにおいて、戦いの前にささげものをする事、全焼のいけにえをささげることは非常に重要なものとして扱われていました。なぜなら、王は神様への従順の証として、また、戦場に向かう兵士たちを聖別してその上に神様の守りがあるようにと、そのことを求めるためにそれらのことを行っていたのです。ですから、サウル王も同じように神様の前にいけにえをささげていました。しかし、ここに大きな問題があったのです。それは、サウル王はこの時預言者サムエルからギルガルという場所で7日間留まり、自分の到着を待っているようにという指示を受けていました。「待っていないさい」と言われていたのです。本来なら、サムエルがやって来てからいけにえを神様にささげるはずになっていたのです。しかし、サウル王は待つことができなかったのです。なぜなら、大勢のペリシテ人たちが迫って来ているのを目の当たりにして、それに恐れをなした民たちが自分から離れて行こうとしているその光景を目にしました。自分の許から離れていく民を見た時にサムエルの到着など待ってられない！と、勝手にささげものをささげたのです。

そして、サウルがそのいけにえをささげ終わったときに、彼のところにサムエルがやって来ました。このときサウル王はどんな顔をしていたか？どんな思いだったか？それは分かりません。サムエルは約束通りやって来ました。そして、その光景を見たときに、サウル王がしたことを見たときに、サムエルはナタンと同じように彼の罪を責めて言います。そのことが続く11—12節に記されています。「:11 サムエルは言った。「あなたは、なんということをしたのか。」…、サムエルもナタンやパウロと同じように罪を厳しく扱っていました。そして、罪を指摘しました。では、それに対してサウル王はどのように応答したのでしょうか？続いて「サウルは答えた。「民が私から離れ去って行こうとし、また、あなたも定められた日にお見えにならず、ペリシテ人がミクマスに集まったのを見たからです。:12 今にもペリシテ人がギルガルの私のところに下って来ようとしているのに、私は、まだ主に嘆願していないと考え、思い切って全焼のいけにえをささげたのです。」とあります。

皆さん、サウルは何をしましたか？彼は自分の罪を認めるのではなく、言い訳ばかりを繰り返しています。なぜ自分が罪を犯さなければならなかったのか、自分のしたことを正当化しようとしたのです。確かに、彼のことは理解できる部分もあります。敵が迫って来たことで、実際に民は彼の許から離れ去って行こうとしていました。そのような光景を見たときに彼は恐れや不安を抱いたことでしょう。サムエルも約束していた日になっても現れない、もう問題が間近に迫って来ているのになぜ来るのが遅いのだろうと、そのように心配になっていたことは間違いなかったでしょう。しかし、たとえどんな理由があろうとも、彼は自分がしたことを主の前に犯した罪として扱おうとはしませんでした。自分の犯したその罪を主に対する罪とは考えなかったのです。彼は自分の過ちを認めるのではなく、様々な理由を並べ立てて、自分が命じられていたことに逆らわなければならなかったその理由を述べ、そのことを正当化しようとしたのです。彼は悔い改めをしませんでした。自分の間違いを認めようとはしませんでした。

また、サウルは別の箇所でも同じようなやりとりをサムエルとしています。Iサムエル15章に進んで、24—25節に「:24 サウルはサムエルに言った。「私は罪を犯しました。私は【主】の命令と、あなたのことばにそむいたからです。私は民を恐れて、彼らの声に従ったのです。:25 どうか今、私の罪を赦し、私といっしょに帰ってください。私は【主】を礼拝いたします。」とあります。この場面を見ても、サウルは神様のことばに聞き従ってはいません。この15章の初めから見ていくと、神様はサウルに対してアマレク人を打

ってすべてのものを聖絶しなさいという命令を出していました。しかし、彼は民といっしょになって、羊や牛などの良いものを自ら選んで、自ら惜しんで殺さずに残して置いたのです。彼は神様の命令に背いたのです。そのことを今回もサムエルから責められたときに、彼はなんと書いていますか？「私は罪を犯しました。私は【主】の命令と、あなたのことばにそむいたからです。」とそのように告白しています。これは一見すると、サウルは先ほどとは異なって自分の罪を認めて、そのことを悔いているように見えるかもしれませんが、確かに、自分のしたことを悔やんでいます。でも残念ながら、これも神のみこころに添った悲しみとは異なるものでした。なぜなら、彼はこの後も変わらずにいろいろな理由や言い訳を口にしてからです。このように書かれていました。「私は民を恐れて、彼らの声に従ったのです。」と。サウル王は主の声に従うべきでした。しかし、彼は民の声に従ったのです。そして、そのことを彼らが自分をそのようにさせたのだと言い逃れをしようとしたのです。

サウル王の心の中にあつたもの、心の中心にあつたものは神様ではなく自分でした。神様に対して罪を犯したのではなく、自分自身が中心にあつたのです。確かに、神のみこころに添った悲しみではない世の悲しみというものも、実際に悲しみは経験します。打ちひしがれることもあります。涙を流すこともあります。しかし、その悲しみが神様に対してのものではなく、自分に対してのものであるなら、それは世の悲しみになるのです。世の悲しみとはいったい何でしょう？それは、神の栄光を軽んじたことを嘆くのではなくて、罪を犯した自分が恥をかいたり、自分が受ける痛みをもって嘆いていることです。ですから、この世の悲しみを覚えている人の特徴は、この人は自分自身のことに目を向けて悲しんでいるから自分がだれかから指摘されるようなことがあれば、自分の正しさを証明しようとしたり、自己防衛に走ったりします。自分に目が向いているから、自分が責められる時には自分を守ろうとします。神のみこころに添った悲しみは神様を傷つけてしまったということを感じています。神様を傷つけてしまったことに目を向いているから自分が責められる時に自分はそこにはいません。

サウルは世の悲しみを覚えていました。自分自身のことに心が留まっていたのです。そして、そのことを覚えていたからサムエルはサウルにこのように書いています。Iサムエル15:26をご覧ください。

「26すると、サムエルはサウルに言った。「私はあなたといっしょに帰りません。あなたが【主】のことばを退けたので、【主】もあなたをイスラエルの王位から退けたからです。」、ダビデの悲しみとダビデに罪の赦しをもたらしたその悲しみとこの世の悲しみは全く違うものでした。世の悲しみは罪の赦しをもたらすのではなく神様からの罰がサウルの上にもたらされたのです。

でも皆さん、それでもなおサウルは変わりませんでした。その続きを見ると彼はこんなことを口にして書いています。30節を見てください。「30 サウルは言った。「私は罪を犯しました。しかし、どうか今は、私の民の長老とイスラエルとの前で私の面目を立ててください。どうか私といっしょに帰って、あなたの神、【主】を礼拝させてください。」、カギになることばがあります。「私は罪を犯しました。しかし、…」と。「間違っていました、ごめんなさい。でもね…」と、私たちもよく口にしませんか？サウルは自分のことに目が向いていました。間違いなく、彼のうちには神様を悲しませたという思いよりも、他の人の目を気にする思いのほうが勝っていたのです。彼は人の目を気にしていたから、罪を犯してそれを指摘されたとき、周りの人々からどう見られるかということを考えていたのです。

このように見たときに、ダビデとサウルの間には大きな違いがありました。一方は罪を犯したことで生じる様々な影響も素直に受け入れて、神様を悲しませたことを心から嘆いていました。もう一方は罪を犯した自分が恥を受けたり痛みを感じることを嘆いていました。では皆さん、果たして私たちがだれかから罪を指摘されるような時に、私たちはどのように応答しているのでしょうか？私たちが悲しみを覚える時にその悲しみはどちらの悲しみでしょうか？私たちの応答は、自分の罪が愛する神様に対して泥を塗ってしまったこと、御名を傷つけてしまったこと、そのことを心から悲しんでその罪と向き合おうとするその態度でしょうか？それとも、自分の罪を否定していませんか？自分の罪を誤魔化したりして、

神様ではなく自分に目を向けて悲しんでいる、そのような態度でしょうか？

皆さん、他の人のことを考える前に自分自身のことを考えてみてください。神様中心の悲しみを覚えているのか、それとも自己中心の悲しみを覚えているのか、そのことをよく吟味してみることです。これは非常に大切なことです。今まで私たちは「神のみこころに添った悲しみ」と「世の悲しみ」との違いを考えて来ましたが、この二つのこと、特に「神のみこころに添った悲しみ」がどうして私たちにとって重要なのか？どうしてこれが非常に大切なのか？それはⅡコリント7章に戻って見たときに、パウロが述べていることから明らかだからです。「神のみこころに添った悲しみ」は何かを生み出すからです。10節にこのように書かれていました。「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、…」と、この悔い改めこそ私たちにとって非常に大切な部分になります。そのような悔い改めを生み出すからこそ、私たち自身が神のみこころに添って悲しんでいるのか、あるいは、世の悲しみを覚えているのか、そのことを考えることが大切になるのです。

そして、この悔い改めについて今から時間をかけて見ていきたいと思いますと言いたいところですが、今日はもう時間がありません。来週、五つ目の要素としてそのことを詳しく見たいと思います。この四つ目と五つ目の要素は密接に結びついています。ぜひ、来週まで忘れないように覚えておいてください。

さて、今日、私たちは壊れた環境を修復するための四つ目の要素である「神のみこころに添った悲しみ」についてみことばから考えて来ました。皆さんどうだったでしょう？私たちの覚えるその悲しみは「神のみこころに添った悲しみ」でしょうか？それとも「世の悲しみ」でしょうか？私たちが自分自身のことを見るなら、確かに、罪を指摘されたりする時、私たちはそれを素直に受け入れて悔い改めることに難しさを覚えることがあります。それはどうしてでしょう？人それぞれ違うかもしれませんが、私たちが自分の過ちや間違いを認めたくなくなったり、自分の弱さを認めたくなくなったりするからでしょうか？また逆に、自分の正しさを主張することを願ったりするからかもしれません。ときに、それは自分のもっている喜びや平安、幸いなど、それらをだれかに奪われたくないという思いからかもしれません。儂い罪の楽しさというものを手放したくないと思っているから、口では「ごめんなさい」と告白していても、そこから立ち返ってすべてを捨てるということを拒んでいるのかもしれない。

そのようにして自分の罪を罪として認めないのであればどうなるのでしょうか？私たちの心は次第に嘆きや失意で埋め尽くされていきます。罪をそのまま放っておくということはその者にとって非常に大きな問題になります。ですから、最後に一人の人物の証を見て終わりにしましょう。この人物は私たちが模範に出来る人物です。この人は自分がどれほど酷い罪人であるかということを認めていました。そのことを素直に告白しています。そして、この人はそのことによって神様のうちに喜びを見出して歩み続けることができたのです。その人はだれでしょう？もちろんパウロです。パウロはⅠテモテ1:13-17でこのようなことばを記しています。「:13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。:14 私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。:15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。:16 しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。:17 どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。」。パウロは自分の犯した罪がどのようなものかを認めていました。自分がかつて神様を汚す者であったと認めています。かつて神様と教会を迫害する者であったこと、また、暴力を振るう者であったとも認めています。彼は誤魔化そうとはしていません。はっきりとそのことを口にしていました。彼は何ら自分の弱さや罪深さを隠そうとはしていませんでした。

皆さん、なぜでしょう？どうしてパウロはそのようにはっきりと罪を告白できたのでしょうか？それは



彼が、そんな罪深い自分さえも救ってくださったお方を覚えていたからです。彼は自分がどれほど神様を傷つけてきたのか、どれほど神様の栄光に泥を塗って来たのか、そのことを心に覚えていたからです。でも、そのことで心が打ちひしがれていたのではなかったのです。彼が目を向けていたところはキリストにあるあわれみ、キリストにある溢れんばかりの赦しです。そこに彼は身を委ねていたのです。彼が自分のしたことを思い続けているなら、それは彼の心をくじいて絶望に浸らせるようなものだったでしょう。でも、彼はこんな自分さえも救ってくださった神様を心から愛していたからこそ、そこにしか助けがないこと、そこにしか救いがないことを確信し、そこに目を向け続けていたのです。

神様を愛しているからこそ、神様の前に罪を犯したのであれば、神様に対して悔い改めてまた再び聖さを求める歩みをしようと思います。それがパウロの生き方だったのです。そして皆さん、感謝なことに、この主を自分自身の救い主と知っているから、このキリストのうちに私たちはすべてのものに勝る宝を見出したのです。この世の何ものにも代えることのできない神様にある宝を見出しました。それなら、この方に罪を犯したなら、そのことを嘆いてそのことを悔い改めて、そして、正しい歩みをしていこうとするはずです。私たちは間違いを犯さないのではありません。私たちは間違いを犯します。私たちが自分自身の過去を振り返ってみれば、自分はどれ程愚かで罪深い存在であったことか…。しかし、そんな私たちを救ってくださったから、今、私たちはこのように歩むことができるのです。

もし、まだこの主を知らない方がこの中におられるなら、今日、この主イエス・キリストにある救いを知ってください。あなたが罪人のままでいるなら、その先はみことばが教えてくれていることは、必ず、死後さばきがあるということです。神様は必ず罪を正しくさばかれます。でも、みことばが教えています。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」と、そんなあなたを救うために来られたのです。ですから、どうかお一人ひとり、その罪を認めて神様の前に出てください。この主を心から受け入れて、その方のために歩む人生を始めてください。

兄弟姉妹の皆さん、この主に心を留めて歩んでいきましょう。私たちは数多くのものを赦されました。それでもなお私たちはいつも恵みによって生かされているのです。それなら、罪を犯した時にそのことをただ悲しんで終わるのではなく、神様の栄光を明らかにするために、罪を脱ぎ捨てて新しいものに変えられた者として聖さを求めて歩み続けていきましょう